こころのありか

北海道大学大学院医学研究科　瀬谷　司

医系大学は医学教育を標榜する機関であり、教育と研究を責務とする。医学の内容は人間社会と不可分のため、時代・場所・為政者に翻弄される。これはエッセイなのでそのような網羅的な背景を吟味して叙述するものではない。生命科学の１研究者の立場から見える基礎教育・研究の在りかに触れてみる。一般の理系大学と医系大学には真理を物質・生物全体に広げるかヒトと疾患に絞り込むかの相違はあるがサイエンスを基盤にして実験的裏付けを基調にする点は共通すると云ってよい。従って、スキルの修得は必須になり、これは日夜の修練を要する。医学部であろうと、また頭がよくても、遊んでいてはダメである。長く大学院生の研究指導に携わっているが、実験を根気よく続ける能力は学歴と必ずしも相関しないようである。研究はそれ自体が世界を構築し、生涯の伴侶になる。出世など世俗の動機で研究すると多分辛い。

しかし、世界に飛躍するとき、研究に没頭しうる能力だけではダメなようで、コミュニケーションの能力も必要になる。臨床では基礎と違う価値観があり、そつのないコミュニケーション能力を養うことは重要であろう。両方を養えば理想的である。しかし、処世術だけで基礎研究の世界を凌ごうとすると価値観の違いに苦しむことになる。あくまで研究オリエントのベースがあった上でのコミュニケーション能である。医学部出身者が泥まみれの実験に厭わずに取り組むようなら日本も第 2、第３の Yamanaka を生むかもしれない。

閑話休題。北大時報（H24. 10）の博士学位記授与のページ（47 page）を見て驚いた。９月の学位取得者 101 名のうち 57 名が（名前から判断して）外国人である。日本人は 44% で、中国名の人が 50%近くを占める。私は国粋主義でこのことを非難するつもりはない。もともと極東の島国で吹き溜まりの文化を涵養して来たのが日本文化であり、それを醸成したのが国史である。今の名前が外国人でも日本に学び、そこで生活圏を得れば次世代からは日本人になる、弥生時代以来そうして日本が形成されてきた。今が、飛鳥・天平以来の渡来人時代となっても私はそれに抵抗は無い。他に少子・高齢化の解決策などあるはずもない。問題はそのありようである。

かつて日本は白村江の戦があり、元寇があり、昭和の敗戦があってそれでも外国の侵攻は免れた。紀元 3 世紀以来の史書に見られる歴史の中で日本のアイデンティティを言語と文化で共有してきた。こんな例は世界に無い。中華の王朝は勿論、ローマやカルタゴ、欧州諸国の起源、ユダヤ人やソグド人を挙げるまでもない、歴史は１つの国と文化が長く続かないこと、必ず滅びが来ること

を教えてくれる。だが、最初から多民族を許容した米国や豪州など移民国家も理想とはほど遠い。その中で日本が独自の言語と不侵略の国を2000年以上堅実に保持して来たことは希有と言ってよい。それは渡来人が固有の文化を在来文化（言語を含めて）に融和して国造りしてきたからではないのか？断じてその逆ではない。

日本語は膠着語で、文法の基盤はアルタイ語である。外国文化が外国語で入ってきてもそれを漢字・カタカナなどではめ込み式に「てにをは」文法体系に取り入れて日本語化した。会話が英語や中国語で語られることはない。「やまとことば」は卑弥呼の頃から変わっていない。私は何が言いたいか、これからも米中以外に言語は文化としていくらでも入る。しかし、日本語を話し、単語を借入して表記する限り日本語は残り文化は継承される。肌の色が黒かろうが白かろうが混血しようが日本語で意志を疎通する者は日本人である。日本で博士を取り、生活を望むなら日本語で表記し、日本の文化を理解し、それを自分と快く融和することを学んで欲しい。日本の中に異文化圏を作るべきでない。世界がどう変わろうと、日本で生きるなら英語や中国語を公用語として使って欲しくない。だが、それは日本語を話す者は外国人より偉いといった差別や偏見に繋がってはならない。

私は科学者だからサイエンスは英語で読み書き、論文を英語でまとめる。このことを「太平洋戦争の当事者に人材を欠いたせいだ」とは思っていても言わない。東條英機のような役人気質の教条主義者は尊敬できないし、勝って欲しくもない。米国が勝ったのはその当時の体質がまだしも民主的であり、日本は人材が能力を発揮できる体制でなかった；軍部が天皇を祭り上げて形式主義と虚礼体質を変えてなかった；ことにある。サイエンスの多くが英語になっているのは欧米文化に先進の気鋭があったためで、それは今でも逆転していない。私はそれを認めるから論文は英語で書き、欧米誌に投稿する。ことサイエンスに関して国際化は必須であり、日本も研究は英語化する必要があると思う。

しかし、日本文化に関して私は些かの劣等感もない。この文化はそれを離れてみても素晴らしい。何より文化に差異はあっても優劣はない。役人や政治家は朝令暮改を繰り返して国は疲弊しているが、日本を構成する多くの人々は謙虚で慎ましく、自己表現が下手だがどこか逞しく生きている。それは文化に内在する。その文化の中で利己主義、自己本位、傲慢、ご都合主義を広げてもらっては困る。謙虚には謙虚、質朴には質朴で対応すべきである。大学のかたちは混迷にあるが、人材の養成は重要な役目であることに変わりはない。教育の風土は目先の利害や単なる形式･技術でなく、「こころ」を伝えることが大切なのだと思う。

（　北海道医学雑誌 2012　掲載　）